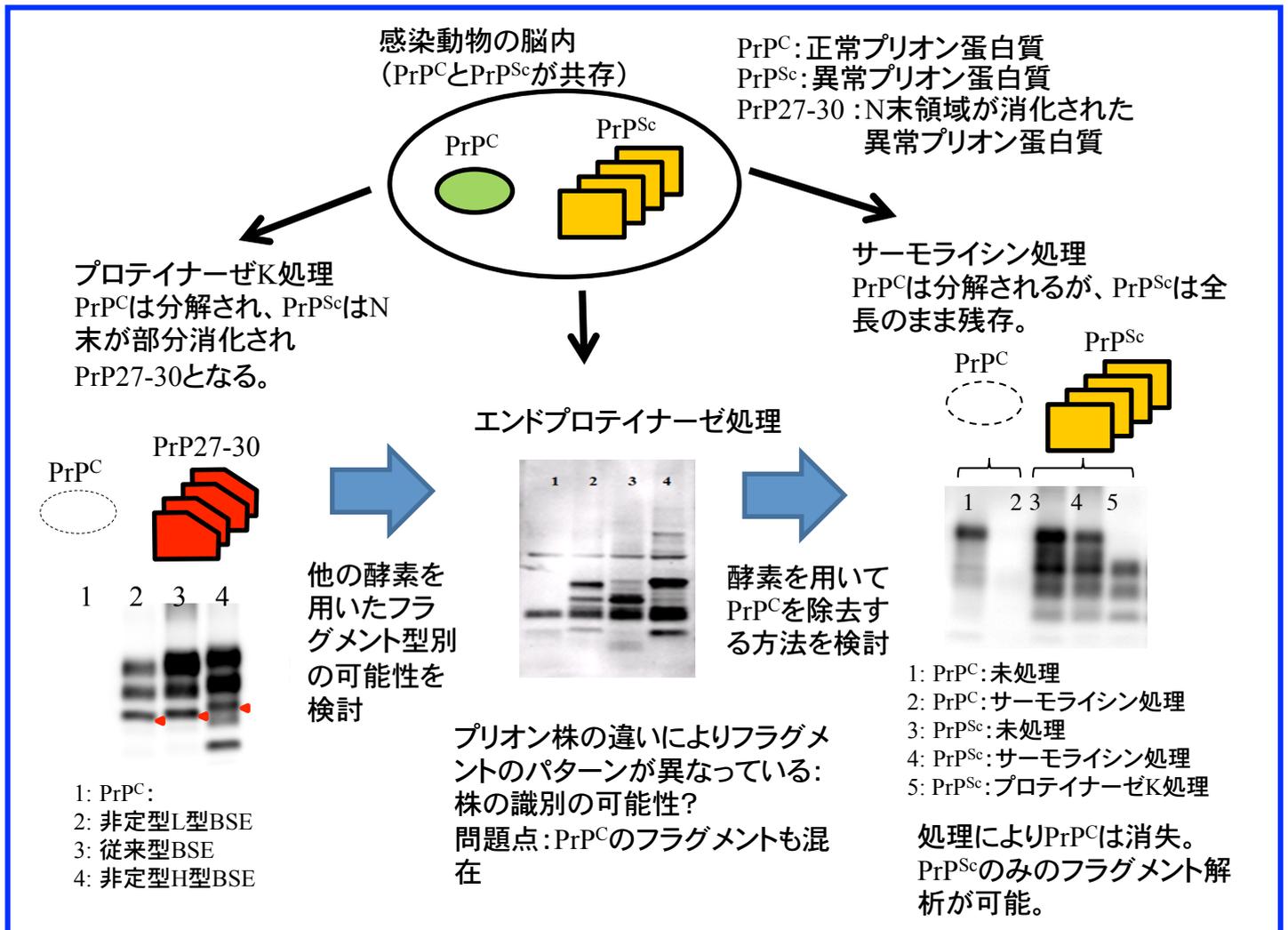


異常プリオン蛋白質の性状解析に関する研究

研究分担者: 動物衛生研究所インフルエンザ・プリオン病研究センター 横山 隆



解説

- 一部のプリオン株はプロテイナーゼK消化によるフラグメントの違いによる識別が可能である(左)。
- しかし、多くのプリオン株は同じ大きさのフラグメント(PrP27-30)となるため、他の酵素を用いた型別の可能性を検討した。
- エンドプロテイナーゼ処理による新たな識別の可能性が示唆されたが、このバンドにはPrPCのフラグメントも混在する(中)。
- サモライシン処理によりPrPCが分解され、PrP^{Sc}のみの型別が可能となった(右)。
- PrP^{Sc}の型別による脳内のプリオンの新たな分類の可能性が示された。
- スクレイピー羊の脾臓内には、複数のプリオンが共存するため、末梢組織から検出されるPrP^{Sc}の性状は、分離されるプリオンの性状と必ずしも一致しない。